

若者を考える、若者と考える

YOUTH SERVICE

特別号

若者と支援者をつなぐ広報誌

YOUTHSERVICE 特別号 2023年3月30日発行



アンケート
集めています！
広報誌へのご意見・ご感想
お待ちしております。



- 2 ぶちメッセージ ほか
- 3 特集記事
ユースワーカーがいるセンターの日常
- 8 レポート「ユースワーカーのあり方を考える」
- 10 ユースインフォ



— CATCH YOUR DREAM —

京都つくば開成高等学校

通信制 / 単位制 / 普通科

ユースワーカーがいるセンターの日常

ユースワーカーは日々たくさんの青少年と接しています。ユースワーカーがひとりひとりの青少年との関わりで、いったいどんなところ、どんな瞬間にアンテナを働かせているのかを、「ユースワーカーの目線」で事例に沿ってご紹介します。



Aくんと関わり

あなたがもしユースワーカーなら…



ないかの理由を聴くことができた。

家に幼い兄弟がいるが、親が忙しくて自分が面倒を見たり家事をしたりしないといけないこと。

大変になると、学校に行く元気ややる気なくなってしまうが、ちになる時もあること。

興味のない科目の勉強は成績が悪いけど、自分はものを作ったり絵を描いたりすることが好きだからそういうことがずっとできたら嬉しい、と将来の夢も語った。

「そういうことができる高校ってあるのかな？ 今からでも勉強して受かるかな？」とユースワーカーに相談していた。

高校に入学し、久々にセンターにやってきたAくん。

高校生活について質問すると、「実は……」から始まり、高校での人間関係になじめず、あまり登校できていないことを話してくれた。「家でやらなアカンことのプレッシャーもあるし、モヤモヤが晴れない。なにをしてもつまらなく感じるし、楽しくない。」と、落ち込んだ様子だった。

その後高校を卒業し、社会人になったAくんがセンターに報告のため来館した。



ぷちメッセージ

あなたにとっての チャレンジ

ユースカウンシル京都
代表
鈴木 優太



初めまして、ユースカウンシル京都の代表の鈴木優太です。今回は、若者の皆さんに向けたメッセージを届けさせてもらいます。

私が伝えたいことは二つです。

一つ目は、自分の中で疑問・不満なことを、そのままにしておかないで欲しいという事です。

今、この文章を読んでいる皆さんの中には「どうなっているんだろう」というような疑問や「なんでこうならないのかな」というような不満はありますか。その疑問・不満に対して少しでも行動することによって今の生活がよりよくなるかもしれません。そのチャンスを逃さないようにしてってください。

二つ目は、日常の生活の中でチャレンジをすることを恐れずにいて欲しいという事です。

皆さんが乗り越えられそうだけれども、乗り越えていない何かしらの壁はありますか。私は、そのような壁を乗り越えようとするのがチャレンジだと思います。ある人にとってのチャレンジは「楽しく人と話すこと」。また、ある人にとってのチャレンジは「初めての場所に経験を求めて飛び込むこと」です。チャレンジのハードルは人それぞれです。皆さんにとってのチャレンジは何か一度考えてみてください。そして、ふとした時に実行してみてください。

ユースカウンシル京都 活動紹介



『輝く学生応援アワード2022』の特別賞を受賞したすごろく企画をはじめ、複数の企画を行いました。

ユイッター

中央青少年活動センターに設置した質問投稿箱に寄せられた質問に私たちが回答を返信し、交流する企画です。質問の多くは、センターを利用する高校生、大学生からの勉強や進路に関する悩み等であり、若者の生の声を伝えられる場として利用して頂いております。

わかものまちなみサミット2022

昨年11月、NPO法人わかものまちなみの皆さんと『わかものまちなみサミット2022』を共催しました。立場も年齢も様々な約100名の方々にご参加いただき、たくさんの気づきや刺激、そして貴重な縁が生まれる場となりました。開催から数ヶ月が経ちますが、今も実践者同士等の交流が続いており、今後の活動がますます楽しみです！

公益財団法人 京都市ユースサービス協会は、京都市内7カ所の青少年活動センターと、子ども・若者総合相談窓口、生活困窮世帯等の子どもに対する学習支援事業、社会的養護自立支援事業の一体的かつ効果的な運営を指定管理者として受託しています。青少年活動センターは、それぞれの施設・設備に特徴があって、個性的な事業活動をしています。また、厚生労働省から受託し、地域若者サポートステーションの運営を行い、若者の社会的自立や職業的自立に向けた支援も行っています。

「ユースサービス」とは、子どもから責任ある大人へと成長する青少年を支援することです。子どもたちが家庭、学校、地域社会、職場などを通じて成長し、自分自身の興味や関心を高める過程で、必要に応じて助言や情報、または多様な人的・物的資源が得られるような機会を提供します。そして青少年自身の積極参加によって、青少年と協働の豊かな地域社会を創り出すことを目的としています。



おたえる



初めてみる顔だなあ。「どんな漫画読んでんの?」とか「めっちゃ盛り上がりってるやん、なんの話?」とか話しかける。気軽に話ができる大人がいることを知ってほしい。

なんのゲーム? なにが好きなのか教えてもらおう。(Aのことを知ろうとする意識を伝える。)課金とか、しているのかな? どんなゲームをいくつぐらいやっているのかな。

自分の意志であえてひとりで来ていることに反応したい。「今日一人やね!」と声をかける。でも、なんでひとりなんかな? という疑問。

忙しくてもじっくり話を聴く。一人で来ているし、大人と話したいという青少年は気になる存在。また、自分がAにとって困った時に話せる大人になれるかもしれないので、関係性づくりのため。言葉には表れないAの気持ちがあるかもしれない。

部活に入っていないんや。どうしてかな? なにか理由があるかもしれないので、話してくれるか様子見。

土日が手持ち無沙汰なのか。好きなことはあるのかな? 平日はどうして過ごしているのかな? 普段はなにをしているか聞いてみる。部活や塾に行っていないことの理由があるのかなど、会話の中でAの想いが聴けたら。

「Aくん、おかえり! 学校帰り?」などさりげない言葉をかけ、今日は横に座って話してみよう(いつも以上に自分のことを話したそうにしている)。

家事の大変さや学校を休みがちなこと、しっかりと聴き受け止める。同時に、家庭の詳しい状況やその状況をどう感じているかを聴く。

何が大変だと感じているのか聴きたい。Aが思いや葛藤を話し出したら、まずは受け止め、力になれることがないか一緒に考える。Aが家事をしないと家庭のバランスは崩れる? ヤングケアラーの可能性もあるけど、Aがどう受け止めるかわからない。頑張っているAを否定してしまわないよう、家の手伝いもしつつ、他に夢中になれることを提案したい。またヤングケアラー向けの活動、頼ることができる場所を探す。

好きなこと・ものについてとことん話してもらう。事業参加を通して、同じものが好きな人と触れ合う機会を作れないかを考える。または好きなことで企画ができるように提案をしたい。

一緒にiPadで高校のHPなど見ながら前向きに探したい。決めるのはAだけど、選択肢を増やしてあげたい。それに年齢が近い人から話を聞けた方が現実味を感じやすいかも。大学生の参加が多い事業を紹介してみる。

塾以外の場でも勉強ができる機会や場所の情報を伝える。センターと一緒に勉強やるのもありかなあ。学習会には参加できそうかな?

事例

最初は、学校の友達複数人で青少年活動センターのロビーに遊びに来ていた。おしゃべりしたり、漫画を読んだり、ゲームをしたり、友達同士で楽しんでいるようだった。

ユースワーカーもそのグループとおしゃべりを通して関わりを持つうちに、Aくんはスマホゲームが好きなことがわかった。



その後も何度か友達と一緒に来館していたが、ある日ふいにAくんが放課後ひとりでセンターに遊びにきた。気になって話しかけてみると、

以前ユースワーカーと話した際、自分が好きなスマホゲームの話をしてくれたのが嬉しくて、また話ができたかと思いい、寄ってみた、と言っていた。

自分は部活に入っていないけど、この時間、友達はみんな部活や塾で忙しいと話していた。

「自分だけ暇やわ。土日も部活の友達多いし、自分もなんかしたいけどなあ。」とこぼしていた。

その後もAくんがひとりでセンターに来館する日があり、ある日、なぜ部活に入っていないかの理由を聴くことができた。

家に幼い兄弟がいるが、親が忙しくて自分が面倒を見たり家事をしたりしないといけないこと。



大変になると、学校に行く元氣ややる気がなくなってしまうことになる時もあること。

興味のない科目の勉強は成績が悪いくけど、自分はものを作ったり絵を描いたりすることが好きだからそういうことがずっとできたら嬉しい、と将来の夢も語った。



「そういうことができる高校ってあるのかな?」

今からでも勉強して受かるかな?」とユースワーカーに相談していた。



青少年活動センターのロビーでの過ごし方は自由自在で、一人で過ごしている青少年もいれば、Aのように友達同士で遊びに来ることもあります。そんなロビー空間において、ユースワーカーは、青少年が気軽に利用できるようになるように試行錯誤しながら、なんでも話せる存在としての関係づくりを行っています。この場面でも、Aや他の友達とも関係構築を意識しながら、まずは話しかけてみることから始めます。また、ロビーで実施しているプログラムをきっかけに、グループに関わることもあります。



ユースワーカーとの関わりが増えくると、ふとした瞬間に、自身の想いや本音を青少年自身から話してくれることがあります。この場面でAは、「自分も何かしたい」と伝えてくれました。その想いを受け、ユースワーカーは、どんなに小さなことでもそれが実現できる方法を一緒に考えます。センターで過ごすのであれば、ロビーの他、勉強スペースとして開放している『自習室』も使えます。また、各センターで実施している多種多様なボランティア活動の中に、Aがやってみたいと思う活動があるかもしれません。他にも、普段は参加しているロビープログラムに、「センターでやってみたいこと」と仲間を募集して企画者になってみる

ことも考えられます。まずは「何をしたいのか」を聞いてから、センターで出来る活動や事業を紹介したり、センターが持っている情報を提供し、センター外の活動を紹介したりつなげたりしています。



何気なく話をしている中でも、青少年の気になる言動や様子が垣間見えることがあります。この場面では、Aの話から、彼の背景が浮かび上がってきます。まずはAの話を受け止め、Aの気持ちを考えながら声かけをしたり、一緒に考えたりします。ワーカーの気付きにもあるように、家庭内での役割がAの生活へ影響を及ぼしている状態から、ヤングケアラーの可能性が考えられるので、当協会が実施している、『子ども・若者ケアラー』の事業を紹介することもできます。しかし、一方的にヤングケアラーと決めつけず、本人の気持ちを大切にしながら、現状を客観的にとらえることをできるようサポートすることをポイントとして挙げています。

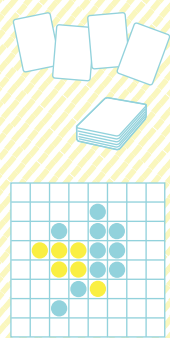




Aのこと、気にかけていたよと伝えたい。「うわー！ 久しぶりやん！ 元気にしてた？」と声をかける。

「そうなんだね」と真剣に聞く。Aにとってワーカーが具体的にどういった姿勢で関われば良いか、Aのためになにができるかを知りたい。

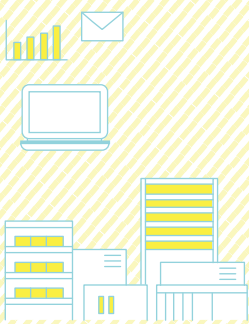
困っていることが本当にそこなのか、中学時代との違いを聞いて現状を知りたい。今のAを知るための質問をしたり、関係のない雑談をしたり、たくさん話そう。



オセロとかゲームに誘ってみて、話の続きを聞くのはどうだろう。面と向かって話すよりもリラックスできるかも。人間関係のどういった悩みなのか、プレッシャーやモヤモヤについて会話をしながら聴く。



報告をしにいつも顔を出してくれて嬉しいな、と伝える。社会人生活の近況を聞きながら、これまでと変わらず、またいつでも帰ってこられる場所を感じてもらいたい。社会人になっても30歳まで、センターが利用できることを伝えて、困った時にはいつでも相談ができる関係性を継続して構築しよう。



「ユースワーカーの目線」いかがだったでしょうか。

今回は約10名のユースワーカーが「もし自分がAくんと関わっていたなら」を想像して書いてくれました。

ユースワーカーはひとりの青少年に対して、会話や行動、時にはちょっとした表情やしぐさからも、気持ちを感知取ろうとしています。

事例にもあるように、時には青少年活動センター以外の機関に青少年をつなげることも必要になります。青少

事例

ユースワーカーが伝えた「ヤングケアラー」について自分でも調べてみたAくん。自分と近い境遇にある人がいること、そんな人たちと話せる場があることを知り、少し心強く感じたAくんは、たびたび家庭でのことを話そうになった。

そして、ユースワーカーと一緒に探した「高校に行きたい」という目標ができた。同時期に参加し始めた学習会で、受験に向けて勉強を始めた。

●高校に入学し、徐々にセンターにやってきましたAくん。

●高校生活について質問すると、「実は……」から始まり、高校での人間関係になじめず、あまり登校できていないことを話してくれた。

●「家でやらなアカンこと、のプレッシャーもあるし、モヤモヤが晴れない。

●なにをしてもつまらなく感じるし、楽しくない。」と、落ち込んだ様子だった。

ユースワーカーは、Aくんの様子を見て、Aくんがしんどさを吐き出せる場所があった方がいいのではと思い子ども・若者総合相談窓口を紹介した。

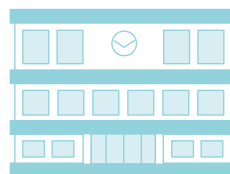
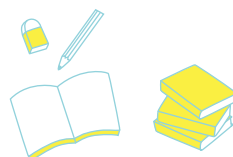
紹介を受け、話してみようと思ったAくんは窓口相談に行ってみた。何度か悩みを聞いてもらうことで、モヤモヤについて言語化と整理ができるようになり、少しずつ高校にも戻れるようになった。

●その後高校を卒業し、社会人になったAくんがセンターに報告のため来館した。社会人生活はしんどいこともあるけれど、やりがいがあることを実感している。自分がやりたいことをできている。やりたいことをもって見つけていきたい、と楽しそうに話した。

年活動センターは、青少年にとってひとつの居場所や拠点です。さまざまな背景を持つ青少年に対応するため、青少年が「居場所」だと感じられる場所や、気軽に話せる大人がセンター以外の場でも増えていくことが大切です。

地域や社会全体で「ユースワーカーの目線」を持ちながら青少年を見守っていくことが大事だと考えています。

※この事例はフィクションです



学習支援事業の様子

当協会では、様々な事情で家庭での学習環境が整いにくい中学生を主な対象として、学習習慣づくりや高校進学のためのサポートを目的とした『学習支援事業』を実施しています。ユースワーカーが青少年と話す中で対象者だと気がつくことも多く、本人の学習意欲を尊重して学習会を案内し、参加にいたることがあります。



子ども・若者総合相談窓口

青少年の相談内容によってはセンターではなく、より本人に寄り添った支援が行える場所につながることもあり、その先のひとつとして当協会の子ども・若者総合相談窓口があります。窓口では、「人間関係について」「心身の不調について」など、様々なしんどさについて一緒に考え、アドバイスしたり、解決のために必要な情報や手伝ってくれる機関を紹介したりします。



ユースワーカーのあり方を考える

事業統括 竹久輝顕

京都市内に7箇所ある青少年活動センター（以後、センター）には、いわゆる「ユースワーク」の考え方もとにかかわるユースワーカーというスタッフがいる。ユースワーカーは若者の余暇領域において、若者の声・思いをもとにしながら、若者とかわっていく。

センターには、多様な若者がやってくる。活動場所（ダンスや演劇、音楽、会議等）として使う、ロビー（オープンスペース）でのんびり過ごす、自習する、友人・仲間と話したり遊んだり、身体を動かす、ごはんを食べる、プログラムに参加する、ボランティア活動をするなど、過ごし方もさまざま。中にはユースワーカーと話しに来る若者もいる。

関係づくりから始まる

ユースワーカーはまずはやってくる若者とかかわりを持つとす。窓口やロビー等での日々のやりとりを続けながら、相手の興味・関心などに合わせて、わからないことは教えてもらったりする。ときには

ロビーの取組などをきっかけに話しかけに行くことや、カフェ・食堂の取組をきっかけにかかわることもある。そして、そのなかで少しずつ関係性が積み重なっていったり、ふとしたときに一気に関係が近づいていたりすることがある。

そこでのかわりは単なる傾聴にとどまらず、どちらかというと若者の捉え方に関心を持ち、それに対しユースワーカーのパーソナリティや趣味・特技、関心・経験、感性、価値観等を用いながらかわっている。もちろんそれらは若者に合う・合わないはあるが、いわゆる一般的・社会的な立場からの画一的な発言ではなく、ユースワーカー個人としての捉え方を用いることを優先している。一個人としての捉え方を提示しながら、若者の捉え方とも照らし合わせ、一緒に考えていく。

ここでは「個人として」と表現したが、若者側がそのように捉えてくれるかという点、そう簡単ではない。センターにおけるユースワーカーは施設職員として権威性を帯びているとも言え、その懸念もあり

ながら、そのことを意識し、できるだけフラットなやり取りできるような、ある種の役割を降ろしてかわろうとしている。

ただ居れること／やりたいことを選ぶこと

青少年活動センターは「活動」という名がついてはいるが、何かやりたい活動がなくても使える場所となっている。ロビーでは、ただのんびり過ごす、暇つぶしをする、マンガ・雑誌を読む、自習するなどのためにやってくる若者も少なくない。ここでは無理にやりたいことを持たなくてもいい。そのことで何らかの評価をされることも、居る意味を問われることもない。

一方で、大小問わず何か「おもしろそう」「やりたい」などという気持ちが生まれたときに、若者自身がその思いを実現したければ、ともに力添えにできるようなかわっていく。必要なものを洗い出すサポートをしたり、一緒に情報を探したり、ときには



提示をしたり、つないだり……すでにあるもの選択肢から選ぶようなものから、自分（自分たち）の中から生まれてくるものの具体化まで幅広くある。ここでは必ずしも主体的な参加を求める訳ではなく、主体的であることさえも選択できることを重視している。また、ユースワーカーのかかわりは若者自身を手厚く保護することとは異なり、若者の可能性を信じ、本来持っている力が発揮できたり、課題を乗り越えていけたりすることを前提にしている。

がらワーカーも場を構成する一員としてかわろうとしている。

かわりの延長線上に生まれる

青少年活動センターはいわゆる相談支援センターのような相談機関ではない。中央青少年活動センター内に子ども・若者総合相談窓口はあるが、青少年活動センター自体に相談目的でやってくるよりも、活動目的や、のんびり過ごす場としてやってくるの方が圧倒的に多い。施設の利用をするなかで、前述のようにワーカーとのかかわりがあり、そのなかでふとした変化に気づいたり、何気ない話でも拾ってみたり、ワーカー自身の「気になる」という感覚も大事にしている。こうした日常の雑談のようなやりとりの延長線上で生まれてくるものもある。それは相談事であったり、「こんなことをしたい」「こんなふうになりたい」という話だったり、「社会への納得のいかなさ」や「自身の大切にしていること（価値観）」に関する話だったりする。

若者とかかわりと言うと、個別的なものをイメージする人もいるかもしれないが、施設利用はグループ利用が圧倒的に多く、ロビーもグループで利用する場面が多い。また、センターが実施するプログラムはグループでの活動が多い。

ともに場をつくる



ワーカーはそれらの話題に対して若者とともに考えたり、ときには

書籍紹介

現場のストーリーを描き、語り、伝える一冊

書籍名：「ユースワークとしての若者支援 場をつくる・場を描く」

出版社：太月書店
出版年：2023年



5年間のプロジェクトを経て刊行！

書籍名：「子ども・若者ケアラーの声からはじまる ヤングケアラー支援の課題」
出版社：クリエイツかもがわ
出版年：2022年



★当協会職員による研修会講師派遣も実施しています！お気軽にご相談ください。

ご寄付のお願い

公益財団法人 京都市ユースサービス協会ではユースサービスの理念のもと、以下を柱として様々な取組を行っております。

- ・若者が本来持っている力を発揮する場づくり
- ・若者が課題を乗り越えていくための支援
- ・若者の市民参加、地域社会への参加を促す
- ・ユースサービスの活動を広く知ってもらうための活動

郵便振替口座番号	00950-2-172487
口座名義	公益財団法人 京都市ユースサービス協会

※いただいた寄付は広報誌『YOUTH SERVICE』にも活用させていただきます。
ご協力お願いいたします。



若者の力が社会を創る。



発行：公益財団法人 京都市ユースサービス協会
〒604-8147 京都市中京区東洞院通六角下ル御射山町262
TEL: 075-213-3681 FAX: 075-231-1231
E-mail: office@ys-kyoto.org HP: http://www.ys-kyoto.org
印刷：株式会社谷印刷所 デザイン：株式会社オム

適職診断



毎月第4金曜日



サポステ

ユスカル！
若者文化市



写真撮影：中谷 利明

11月3日
開催



ユスカル！

ユース
シンポジウム
2022
怪盗モノクロームと
こころのありか



12月18日
13時～15時(前半)
15時～17時(後半) 開催



ユースシンポ

ユースワーカー
養成講習会



9月3日・4日 実施



事務局事業

レクリ
エーション集団
「よみDEER」



ミーティング：隔週土曜日



下京

ごはんのおとも



6月～12月までの毎月第3火曜日



北

なかせいカフェ



毎週土曜日15時～17時



中央

1日体験
ボランティア
ふらっとり
スマホ講座



随時（年2回実施）



南

多文化を
体験するDAY



11月19日～12月10日
毎日ひとつ「お楽しみプログラム」を実施



伏見

演劇ビギナーズ
ユニット



9月24日・25日（修了公演）



東山

地域通貨「べる」



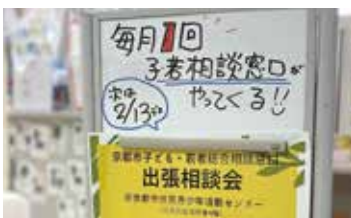
通年・随時
地域通貨「べる」活動報告書を年1回発行
当センターに配架中



山科

子若窓口

出張相談会@
伏見青少年
活動センター



今年度は11月より
毎月第2月曜(12時～14時)
対象：39歳までの方、
そのご家族、関係者など

